

イノベーション部門

「じゅんかん育ち」を学校へ

鶴岡市、山形大学、日水コン、水ingエンジニアリング、JA鶴岡、東北サイエンス

受賞事例の概要

天候不順が続く冬野菜の調達に困っていた学校給食。
下水道資源（消化ガス発電の余熱）を使ってハウス栽培、安価な安定供給システムを構築しました。



▲ 平成31年学校給食（水の天使と）

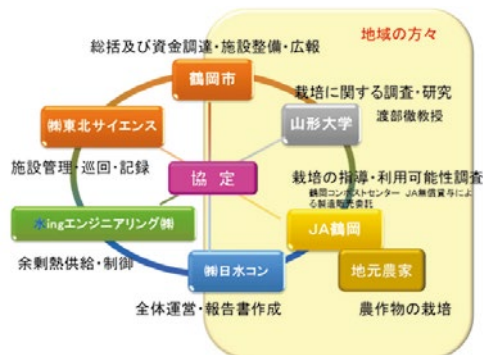
▼ 栽培用ビニールハウス



JA鶴岡栽培担当 ▲



▲ 鶴岡バイオガスパワー（消化ガス発電）



▲ プロジェクト組織構成

PRポイント!

鶴岡市では、消化ガス発電の余熱でビニールハウスを加温し野菜を栽培しています。加温のコストがほぼゼロのハウス栽培です。ここで作った野菜を学校給食に使ってもらうことにしました。

平成31年3月7日、我が国で初めて「じゅんかん育ち」ホウレンソウを学校給食に提供し、小学生の笑顔をもらうことができました。

取組の効果!

ハウス栽培は、熱や栽培のノウハウなど、その道の専門家や多様な仲間がアイデアを出しながら、汗をかきながら運営しています。下水道資源を活用した「じゅんかん育ち」は、一緒に取り組む留学生などを通して世界に羽ばたき、ユネスコ食文化創造都市でもある鶴岡市の新たなページとなることが期待されています。

Key Person



山形大学 農学部
渡部 徹 教授

学校給食は、地元農家による「地産地消グループ」が地元野菜を供給しています。今度このグループに下水道資源でつくる「じゅんかん育ち」を入れてもらうことになると聞いて大変喜んでます。下水道には肥料になる水・汚泥、熱など多くの資源があって、それを活用することで地産地消が進む。これが山形大学が取り組む「スマートテロワール」であり、今後の発展に大きな期待が膨らんでいます。